



TITLE:

# ティムール朝末期における文書・ 書簡作成術の伝統の継承と発展( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

杉山, 雅樹

---

CITATION:

杉山, 雅樹. ティムール朝末期における文書・書簡作成術の伝統の継承と発展. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18721>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2019-09-01に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	杉山 雅樹
論文題目	ティムール朝末期における文書・書簡作成術の伝統の継承と発展		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、ティムール朝末期ヘラート政権で編纂された模範となる文書・書簡の集成や文書・書簡作成の指南書の分析を通じて、当該時代における書記の伝統の継承と発展を明らかにすることを目的とする。</p> <p>利用した主な史料は、一般にインシャー作品（またはインシャー文学）と呼ばれるジャンルに属する。インシャー作品とは、書記の文書・書簡作成術、技巧的散文術に関わる作品群を総称した名称である。その内容や形式は様々であるが、本研究では①文書・書簡作成術の伝授に関する作品を「指南書」、②模範となる書簡・文書の集成を「インシャー作品集」、③両者が混合されたものをどちらの要素に重きが置かれているかを考慮して、「指南書」ないしは「インシャー作品集」と呼ぶ。また、これらの分類を区別せずに総称する場合には「インシャー作品」という用語を用いる。</p> <p>従来の研究では、ペルシア語インシャー作品が生まれたガズナ朝以降、セルジュク朝下では技巧的なインシャー術が発展したが、モンゴルの侵攻以降、モンゴル文書行政システムの影響を受けて文体の簡素化が進み、インシャー術が衰退したと言われている。やがてティムール朝期になって技巧的、装飾的な文体が復活し、特に同朝末期はペルシア語インシャー術の最盛期ともみなされる。しかしながら、インシャー術の最盛期とされるティムール朝期に関しても、インシャー作品そのものの研究が十分に行われきたとは言えず、先行する時代のインシャー作品との関係についてもほとんど言及されることはなかった。そこで、本研究はインシャー作品そのものを分析対象として用いて、ティムール朝末期のヘラート政権において数多く編纂されたインシャー作品の全体的な特徴を検証し、モンゴル時代とティムール朝期との間でインシャー術の伝統がどの程度継承されていたのか、またティムール朝末期のインシャー作品における変化と発展はどのようなものであったのか、という点について具体的に解き明かすことを目的とする。</p> <p>従来、アラビア語・ペルシア語によるインシャー作品の歴史については、ペルシア語インシャー作品研究の嚆矢ともいえるRoemerの研究において、既にその概要が述べられている。しかし、その後新たに発見・紹介された作品も多く、Roemerの研究の発表から半世紀以上を経た現在、改めてインシャー作品の歴史を振り返る必要がある。</p> <p>そこで、まず第一章では、最新の研究の成果を取り入れつつ、アラビア語インシャー作品の誕生からペルシア語インシャー術の最盛期と言われるティムール朝末期に至る、インシャーの誕生と発展の歴史を改めて確認し、Roemerの研究では挙げられていないものも含めて各時代の代表的な作品とその特徴について指摘した。</p> <p>さらに、ティムール朝期のインシャー作品群が持つ全体的な特徴を指摘するため、当時の代表的な18作品を採り上げて、著者の経歴や作品の構成、編纂動機という観点から検証を行った。その結果、当該時代のインシャー作品の特徴として、以下の四点を挙げることが出来た。すなわち、著者の経歴に関しては、歴史家や詩人など文人として知られた人物による作品が、文書行政に関わる職務に就いていたことが確定出来る人物による作品よりも多いことである。また、作品の構成については、モンゴル時代に編纂されたような高度な書記術論を扱った作品は存在しないのに対し、社会の様々な階層宛の書簡用例を集めた作品や書簡の集成が多くを占めている。さらに、文人としては知られているものの、文書行政に関わる職務に就いていたことが確認出来ない人物が、単なる書簡の集成ではなく、書簡作成の作法や諸階層宛の書簡用例を主な内容とする作品を複数編纂している。編纂動機に関しては、作品の多くが君主やその</p>			

側近、有力なイラン系官僚への献呈を目的としていたことである。以上のようなティムール朝期のインシャー作品に見られる特徴は、様々な社会階層に属する人々が持つ文学的関心や書簡作成に対する需要、さらには政権内部におけるイラン系官僚の勢力拡大を反映したものであったと考えられる。

また、上述のように、モンゴル時代はしばしばペルシア語インシャー術の停滞期とみなされてきたが、近年の新たな写本の発見により、実際には当時数多くのインシャー作品が編纂されていたこと、作品によっては技巧的な表現が用いられており、伝統的なインシャー術の技巧自体が軽視されていた訳ではないことが指摘されている。そのため、従来の説とは異なり、モンゴル時代からティムール朝にかけてもペルシア語インシャー術の伝統が絶えることなく継承されていた可能性を検討する必要がある。しかしながら、同じ時代の作品間でも著者の立場やそれぞれの執筆目的の違いによって、さらには同一作品の中でも収録された文書・書簡の種類によって、異なる文体が使用されており、単純に文体の比較を通じてモンゴル時代とティムール朝期のインシャー作品との相違点や共通点を指摘することは困難である。そこで、ティムール朝期のインシャー作品に書かれた書記の心得や書簡作成の作法を抽出し、モンゴル時代を始めとする先行する時代の諸作品に収録されたものとの比較を行った。ここでの比較検討によって、まずはモンゴル時代の作品にアラビア語インシャー作品と関わりの深いアダブ文学からの引用が挿入されるなど、古くからの書記の伝統が受け継がれていたことが確認できた。さらに、ティムール朝期に書かれたインシャー作品にも同じ逸話や記述が残されているが、内容や使用されている文言から判断すると、その記述はアラビア語の作品からではなく、モンゴル時代のペルシア語インシャー作品から引き写された可能性が高いと考えられる。以上のことから、ペルシア語インシャー術の最盛期とみなされるティムール朝期に書かれたインシャー作品は、しばしばインシャー術の停滞期とされるモンゴル時代の作品の強い影響下にあったのであり、その伝統は断続することなくティムール朝にも引き継がれていたと言えるのである。

続く第二章では、従来のインシャー作品研究において極めて不十分であった分野に焦点を当てた。これまでのインシャー作品研究は、当初勅令の写しを利用した行政制度研究が中心であったが、近年では社会史研究や文書行政研究、文化史研究といった幅広い分野まで広がりつつある。しかしながら、ペルシア語インシャー術の最盛期とされるティムール朝期に関しても、インシャー作品そのものを専門的に扱った研究は限られている。一次史料などでしばしば当時の代表的な作品として言及されるインシャー作品の中にも、その構成や特徴など十分な検証がなされていないものも多い。

そこで、第二章では、ティムール朝末期のヘラートで書かれた代表的なインシャー作品の一つ、イスフィザーリーのTarassulの構成と特徴を検証した。イスフィザーリーはティムール朝君主スルタン・フサイン治世に起草官の地位にあり、彼の著作／編纂によるインシャー作品集には、多くの文書・書簡の写しが収録されている。この作品に収められた勅令や書簡の写しには、当時ヘラートで活躍した文人や有力者が登場するだけでなく、スルタン・フサイン治世の外交関係や、君主と宗教的指導者との繋がりを示す情報が数多く含まれており、歴史史料としての価値を確認することが出来た。

また、勅令の写しに関しては同時代の別の起草官の名で編纂された他のインシャー作品集にもほぼ同じものが収録されていることが分かった。どのような経緯でそれらの勅令が別々のインシャー作品集に収録されたのかという極めて根本的ではあるが重要な疑問に対して、現段階では明確な答えを用意することは出来ない。ティムール朝期以外の作品の中で著者が明確にされているものについて、このような事例が存在するかどうかは寡聞にして知らない。しかし、インシャー作品の編纂過程を解き明かす上で重要な事例であると考えられる。

また、差出人と受取人との地位の差に基づく書簡の用語の解説や、書簡用例の配列

順から想定されるイスフィザーリーの描く社会のヒエラルキーは従来のものとは異なり、サイイドやシャイフといった宗教的指導者たち、さらには宗教的職務であるサドルの地位が高められたものであった。さらに、こうした変更はイスフィザーリーが意図的に行ったものであると考えられるため、インシャー作品の執筆を通じて、著者／編者がイスラームに基づく統治を強調したとみなすことも可能であろう。

第三章では、「ザカート免除の勅令」というタイトルを持つ写しを対象として、起草官としてのイラン系官僚がイスラーム法に関わる問題をどのように扱っていたのかを考察した。近年のティムール朝研究の大きな成果の一つに、ティムール朝末期のヘラート政権の君主、スルタン・フサイン治世の統治体制の変化を扱ったSubtelnyの研究が挙げられる。Subtelnyはこの研究において、スルタン・フサイン治世をシャー・ルフ期から始まった、テュルク・モンゴルの伝統に基づく遊牧国家からイラン・イスラーム的官僚国家への移行の試みが最も活発に進んだ時期であったと捉えている。そこで、本章では第二章で扱った作品の著者／編者であるイスフィザーリーが、イスラーム法に関わる内容を持つ勅令はどのように書かれるべきと考えていたのか、という観点から、イラン系官僚としての起草官がティムール朝の統治において果たした役割を考察する。

ザカート＝喜捨はイスラーム法で定められたムスリムにとって義務の一つであるが、その規定は現実にはほとんど顧みられることがなく、アッバース朝期には早くも不正な徴収が行われていた。さらに、モンゴル時代に導入されたタムガはイスラーム法とは相容れない非合法的な税であったが、ティムール朝末期には不正に徴収されるザカートとの区別は曖昧になっていた。このような変化の中で書かれた「ザカート免除の勅令」は、実際にはイスラーム法で認められたザカートとは全く関係がなく、徴税官が商人に対して行うあらゆる不正な徴収からの免除を意味していた。そのタイトルにあえて「ザカート」という用語が使用されたのは、起草官が非合法的なものをイスラームに結び付けて解釈しようとしたためであったと考えられる。このようなイスラームの理念と現実との乖離を表面上埋め合わせる作業が官僚層によって不断に行われていたのが、イラン・イスラーム的官僚国家の実態であったと言える。

続く第四章では、インシャー作品集に勅令の写しと共に多くの写しが収録される書簡の写しを研究対象として取り上げ、ティムール朝期において先行する諸作品からインシャー術の伝統が継承された度合を検証する。ここで具体的な検証対象となるのは、公的書簡の書式である。

まず、ティムール朝末期に書かれた書簡作成術の指南書Makhzan al-Inshā'の構成と特徴を指摘し、そこに収録された冒頭部の用例を先行する時代や同時代のインシャー作品のもの、さらには現存する書簡のものと比較した。先行する時代、特にモンゴル時代に書かれた書簡作成に関する指南書や用例集は、作品の構成自体がそれぞれ異なっていた。さらに、解説される冒頭部の書式には「祈願文を用いるもの」と「祈願文を用いないもの」という二種類があり、それぞれの作品ではいずれか一方が採り上げられて用例が提示されていた。それに対して、Makhzan al-Inshā'の大きな特徴は、従来の指南書では作品毎に異なっていた冒頭部の二つの書式を一つの作品の中に統合し、膨大な数の用例と共に提示したことにある。このことから、同作品はモンゴル時代を含め、ティムール朝末期に至るまで連綿と受け継がれてきたペルシア語書簡作成の様々な伝統的要素を統合し、利用しうる用例を網羅的に集めた、いわば書簡作成指南書の集大成であったと言える。

また、この作品に記された書簡作成における規定の多くはティムール朝末期のインシャー作品に収録された書簡の写しや、同時代の周辺の王朝が発行した現存する書簡においても共有されていたことが確認できる。このことから、ティムール朝末期のヘラートで編纂されたMakhzan al-Inshā'という作品は、当時のティムール朝領域内だけでなく、広くペルシア語が用いられた地域における書簡作成の実践を反映したも

のであったと言えるのである。

さらに、第一章で確認したように、ティムール朝期のインシャー作品の傾向の一つとして、文書行政に関わった経歴を持たない文人が書簡作成のための指南書を数多く編纂したことが挙げられる。その背景として、様々な社会階層に属する人々が書簡を作成し、そのマニュアルに対する需要が高まっていたことが挙げられるが、本作品はこうした時代の要請に応えたいわば書簡作成指南書の集大成であったと言えるだろう。

これまでの考察で明らかになったように、ティムール朝末期に生まれたインシャー作品は、書簡作成における作法や規定の面で、先行するモンゴル時代の作品群から大きな影響を受けていたことは間違いない。少なくとも、各作品におけるインシャー術の伝統の継承という意味では、モンゴル時代を「断絶期」と見做すことは出来ない。一方、先行する時代の諸作品と比べると、いくつかの変化をみてとることも出来る。書簡の用語の解説や書簡用例の序列に見られる社会的階層の変化、勅令の写しにおける用語の選択においては、いずれの場合でもイスラームの理念を統治体制に組み入れようとする著者の意志があったと考えられる。また、ティムール朝末期のヘラートにおける書簡作成に対する社会的な関心の高まりによって、従来にない総合的な書簡作成マニュアルが生み出されることになったのである。

(論文審査の結果の要旨)

西アジア地域とエジプトでは四千年をはるかに超える書写言語による記録の歴史があり、これまでに書き残されてきた文字資料の総量は東アジアや西ヨーロッパ地域に劣らぬ膨大なものがある。イスラーム時代以前の西アジアでは、紀元前3千年紀後半にはすでに古式の楔形文字による主として粘土板に刻まれた公文書が作成されており、前2千年紀前半の古バビロニア時代から公的な文字資料を作成・書写するために専門の書記が養成されていたことが知られている。その後、前1千年紀後半になると北西セム系/アラム系文字アルファベットが広範囲に使用されるようになり、この時期には文字を記録する媒体としてのパピルスや羊皮紙が長期保存に適さず、記録の残存量が減少するために遺例が僅かしかないが、書記養成の伝統は受け継がれ、書記が公文書を作成する技術も伝承されていたようである。

西暦7世紀前半、西アジアに興ったイスラームは、その「預言者」ムハンマド死後の短期間に、西アジア、北アフリカの文明地域を政治的支配下に置くが、早くも8世紀の初めにはウマイヤ朝下で行政用語がアラビア語に統一され、公的な文書作成とそれに基づく行政システムが始まったと考えられている。8世紀の後半に確立した「イスラーム帝国」の典型としてのアッバース朝では西アジアを中心に、新たに征服が進んだ中央アジアや北インド地域から北アフリカに及ぶ広大な領域で郵便制度の整備による迅速な情報伝達の促進と法的な側面からの文書行政の拡充が見られるようになった。こうした歴史の流れの中で、本論文で扱われる公的・私的な文書・書簡作成のスキルを具体的に解説した手引書としてのインシャー作品がアッバース朝時代にイラク、エジプト地域ではアラビア語で、11世紀後半のガズナ朝、その官僚制や文書作成に基づく行政機構を継承したセルジューク朝時代以降のイランや中央アジア、アナトリアではペルシア語で書き残されるようになったのである。

本論文は、全体を通じてティムール朝末期のヘラート政権スルターン・フサイン(在位1469-1506)時代に書かれた文書・書簡作成術指南書の内容分析を中心にまとめられたものだが、論者の問題意識はティムール朝に先立つ時代のイラン地域におけるペルシア語インシャー作品の内容についても及んでいる。本論文の第1章「インシャー作品の誕生と発展」において、論者はイスラーム時代の初期からティムール朝末期に至る、アラビア語、ペルシア語による公的な文書・書簡作成術の歴史の概略を述べ、関心の所在を明らかにしている。論者によれば、ガズナ朝時代に始まり、セルジューク朝期に発展したペルシア語によるインシャー作品は、13世紀後半以降のモンゴル支配時代には停滞期に入り、15世紀のティムール朝時代に入って再び多く書かれるようになるというのが従来の通説ではあるが、論者は12世紀後半から16世紀前半に書かれたインシャー作品計9点の内容を比較することにより、14世紀にもその前後の時代と変わらずインシャー作品が書かれており、それらの内容の全体的な特徴はティムール朝期のものと共通するものであることを具体的に実証した。モンゴル支配時代をはさんでペルシア語によるインシャー作品著述伝統の断絶は見られないという結論は従来の研究成果からも予期できた内容であるが、それを具体的な作品の内容比較を通じて実証したことは評価に値する成果である。第2章では、ティムール朝末期インシャー作品集の実例としてこれまで本格的な研究がなされておらず、校訂テキストも未刊行のイスフィザーリー作 Tarassul が取り上げられ、その内容が詳細に紹介・検討される。論者はこの作品を文献学的に分析する際イラン国内に所蔵される3写本の他に英国、パキスタン所在の3写本を参照しており、また内容分析の手法も精密・堅実である。論者の結論によれば、この作品の特徴は理論的、あるいは実務的な手引書というより、模範的な勅令・書簡の集成という傾向が顕著であることで、所収の書簡用例や勅令の写しの内容からは当時宗教的な

職務として重視されつつあった「サドル職」が社会的ヒエラルキーの上位に位置づけられていることが看取されるという。続く第3章では前章で内容の紹介・分析を行なったイスフィザーリー作 Tarassul 所収の具体的な勅令から特に「ザカート免除」を扱ったものが考察の対象となり、それら4点のペルシア語テキストと日本語訳を掲げながら、さらに綿密な内容分析が進められている。ザカートとは一般にイスラーム社会でムスリムにとって五行の一つとされる「喜捨、救貧税」のことだが、当時のザカートはイスラーム法に違反して不正に徴収される商取引税などを含む不正規税のことを指すようになっており、現実と理念乖離の糊塗を意図するイスラームの公的イデオロギーを統治体制の側から文書作成上で示したものがこれらの勅令の内容に他ならないと結論している。第4章ではティムール朝末期に編纂されたカーシフィーのMakhzan al-Inshā' という作品を題材として書簡作成の規定と実践の内容が紹介・分析される。論者によれば、この作品はそれまでペルシア語文化圏で伝承されてきた書簡作成指南書の集大成としての特徴を持ち、いわゆる「ティムール朝ルネサンス」の精神を体現する作品であったと見なすことも可能であるという。本論文の前2章に比べてこの部分はやや論証が手薄であり、物足りない印象が残るが、この章で扱った文献の特徴を内容の実例を挙げることによって説得的に論を進めている部分は、今後のさらなる研究への展望を提示していると思なすことができる。

本論文は全体として、論者の2年間に亘るイランへの留学の成果を活かし、アラビア語、ペルシア語の歴史文献を学び、研究してきた成果が盛り込まれ、時に装飾過多でレトリックと比喻、これ見よがしの学識を誇示するような典拠の引用に満ちた独特のペルシア語美文によって書かれることが通例であったこの種の文献を、手稿写本から粘り強く丹念に読み解くことを基盤にしており、従来から国内外で行なわれてきたペルシア語インシャー作品研究に少なからざる寄与を行なったものと判断できる。ただ、さらなる文献研究の広がりや深化が求められることは言を俟たない。ティムール朝期以降、イランではサファヴィー朝やカージャール朝期においてインシャー作品の伝統がどのような形で継承されていったのかという時間軸上の全体像やムガル朝期のインドやティムール朝滅亡後の中央アジアにおいてペルシア語による文書・書簡の作成がどのような形で、どこまで伝承されたのかという空間上の広がりを明らかにする等の課題も自ずから浮上して来るのである。これらの課題については、今後の論者の研究の進展に期待を表明したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成27年2月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。